

## 明治37・38年の豪雨災害

明治38（1905）年は、5月の日本海海戦の勝利に世の中が沸き立った年です。太宰府でも6月には各町が曳物を出して祝いたいに盛り上がりますが、翌7月末、この地域としては「未曾有の」豪雨災害に見舞われることとなります（町制施行61周年記念誌『太宰府』）。

福岡県は前年も遠賀川流域を中心に梅雨時期の大雨被害を受けており、「太宰府町議会事務報告」（『太宰府市史 近現代資料編』）によると、太宰府町では明治37年に洪水が発生し、御笠川に架かる石橋3カ所が破壊、里道1カ所が破損し、町の臨時費と関係者からの寄付金で、秋にかけて橋の架け替えと道の修繕を行っています。

ところが翌38年にも洪水が発生、その被害は前年をはるかに上回るものでした。架け替えたばかりの橋を含む、北谷から浦ノ城間の橋8基が陥落、また土地の崩落や道路の損壊等が100カ所近く発生する事態となります。新聞報道では、水城村でもインフラ被害の他、落雷被害や家屋の倒壊があり、また両町村や近隣の地域では前年に続き家屋への浸水

が起き（『九州日報』）、繰り返される被害に苦しめられています。

当時の事務報告書によると、太宰府町では明治38年の災害復旧工事に約307円が計上されていますが、これは前年の経費の実に7倍となり、町財政にもさらなる打撃が与えられたことが分かります。その内、橋の架け替え費用は多額の寄付により賄われており、37年には橋の再建費約30円の半分



が、38年には約160円の6割が寄付金で占められました。御笠川により分断されてしまう集落もあり早急な工事を必要とすることから、特に架橋は寄付に多くを頼っていたと思われるます。

明治37・38年は当時の日本にとって、戦勝による「一等国」デビューという画期でしたが、少なくとも太宰府地域にとっては、2年連続で豪雨という災禍に苦しめられた受難の時期にもなりました。

【バックナンバーはこちら】

ページID7241

太宰府市公文書館 藤田理子

かじた まさこ